The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	須磨の暴風雨 ： 『源氏物語』における神々の諸相
Author(s)	藤井, 由紀子
Citation	語文. 2001, 77, p. 10-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68987
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

須磨の暴風雨

――『源氏物語』における神々の諸相――

藤井　由紀子

はじめに

『源氏物語』須磨・明石巻で、光源氏一行を襲う暴風雨は、光源氏の生涯最大の危機であると同時に、物語の大きな屈折点として重大な意味を持つと考えられる。にも関わらず、この暴風雨については、古注以来、神が源氏に救いの手を差し伸べているとする感応説と、源氏の無罪の主張に対する神の怒りととる懲罰説、この全く対極にある二つの説が並び立っており、いまだ定説を見ない。[1] 現在では、その両面を併せ持つ多義的な構造こそが暴風雨の本質であると説かれてもいる。[2]

このように様々な解釈を許す原因は、ひとえにこの場に働く種々の「異界の力」にある。源氏が祈る「八百よろづの神」「住吉の神」「海の中の龍王」に加え、桐壷院の霊までもが顕現し、それぞれが誰に加護しどのように働くのかを見極めることは難しい。

本稿は、これら「異界の力」の中でも、特に神々の力に注目し、それらの働きを整理していくことによって、暴風雨の複雑な構造を読み説く新たな視座を呈することを目的とする。

一　八百万の神

須磨退去から一年、源氏は「弥生の朔日に出で来たる巳の日」（須磨　二〇八頁）に須磨の海浜で祓を行う。

海の面うらうらとなぎわたりて、行く方もしらぬに、来し方行く先思しつづけられて、

源氏八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ

とのたまふに、にはかに風吹き出でて、空もかきくれぬ。

（須磨　二〇九頁）

源氏が自身の無罪を訴える歌を詠むやいなや、天候は一変し、暴風雨が須磨の地を襲うこととなる。暴風雨はその後一週間以上続き、その激しさは縷々語られていくわけだが、その中でも最も被害が大きかったのが、次にあげる落雷の場面である。

また海の中の龍王、よろづの神たちに願を立てさせたまふに、いよいよ鳴りとどろきて、おはしますにつづきたる廊に落ちかかりぬ。炎燃えあがりて廊は焼けぬ。心魂なくて、あるかぎり

まどふ。　（明石　二一七頁）

雷は源氏一行の間近に落ち、源氏は九死に一生を得ることとなる。いわば暴風雨のクライマックスともいえるこの場面の後、暴風雨がおさまることを考え合わせれば、この場面と先の上巳の祓の場面は、暴風雨の首尾として呼応しつつ共に重要な意義を持つと考えられよう。

さて、ここで注目したいのは、この二つの場面における源氏の祈りの対象が、いずれも「八百よろづの神」「よろづの神たち」であることだ。源氏が「八百万の神」に祈ると暴風雨は激しさを増す。これはいったい何を表しているのであろうか。

従来、「八百万の神」については、単に「多くの神々」と注される程度で、格別な関心は向けられてこなかった。しかし、「八百万の神」の用例を辿り見ていくと、そこに一つの方向性を指摘することができるのである。

「八百万の神」は、『源氏物語』中には他に用例を見出すことはできない。同時代の物語や和歌などに用いられることもそう多くはないのだが、その少ない用例の中から、今、『紫式部日記』に見られる次の用例をあげておく。

月ごろ、そこらさぶらひつる殿のうちの僧をば、さらにもいはず、山々寺々をたづねて、験者といふかぎりは残るなくまゐりつどひ、三世の仏もいかに翔りたまふらむと思ひやらる。陰陽師とて、世にあるかぎり召し集めて、八百万の神も耳ふりたてぬはあらじと見えきこゆ。御誦経の使ひ、たちさわぎくらし、その夜も明けぬ。　（一三〇頁）

寛弘五年中宮彰子の出産の場面である。陰陽師たちの祈禱のさまを「八百万の神も耳ふりたてぬはあらじ」と形容するその基底には、「中臣祭文」の詞章との連結があるとされているが、ここでは、それが用いられているのが、中宮の出産という極めて緊迫した場面であり、また、生まれてくる子が次代の天皇となるべき皇子であるという点に留意しておきたい。

次に、和歌における用例を見ておくこととしよう。

① 承平四年、中宮の賀し侍りける屏風
みそぎして思ふ事をぞ祈りつるやほよろづよの神のまにまに
（『拾遺和歌集』賀・二九三・藤原伊衡）

② 承暦二年四月廿八日、殿上歌合、祝
やをよろづそこらのかみのとしなみによるひるまもるきみがみよかな
（匡房Ⅰ・一五三）

③ 冬の日もはかなく暮れて、大嘗会のいそぎせさせたまふ。されどその日はただうるはしうぞある。……
御神楽の歌、同じ人（＝輔親）、
大八州国しろしめすはじめより八百万代の神ぞまもれる
（『栄花物語』ひかげのかづら　五一三頁）

①は中宮穏子五十賀における屏風歌、②は『江帥集』に見える殿上歌合における祝歌、③は長和三年三条天皇の大嘗会の神楽歌である。このように見てくると、先に見た『紫式部日記』の用例同様、いずれの歌も、天皇（もしくは中宮など天皇に近しい人々）との関わりの上で詠まれたものであることがわかる。そして、②の「よるひるまもる」や、③の「神ぞまもれる」に顕著なように、「八百万の神」が天皇を守護する存在として詠まれていることを押さえておきたい。

従来、光源氏の「八百よろづ」の歌は、祓の場で詠まれたという点から、『延喜式』に載る「大祓の詞」の章句が踏まえられているとされてきた。「大祓の詞」の該当部を次にあげておく。

高天の原に神留ります、皇親神ろき・神ろみの命もちて、八百万の神等を神集へ集へたまひ、神議り議りたまひて、「我が皇御孫の命は、豊葦原の水穂の国を、安国と平らけく知ろしめせ」と事依さしまつりき。かく依さしまつりし国中に、荒ぶる神等をば神問はしに問はしたまひ、神掃ひに掃ひたまひて、語問ひし磐ね樹立、草の片葉をも語止めて、天の磐座放れ、天の八重雲をいつの千別きに千別きて、天降し依さしまつりき。……

高天原の「皇親神ろき・神ろみの命」が「八百万の神」を集めて、葦原中国の平定を宣言する箇所である。「皇親神ろき・神ろみの命」とは「天皇がむつまじく親しむ」神という意味であって、ここでも、「八百万の神」と天皇との関わりは動かない。そもそも、傍線部の箇所は、次の『古事記』の記事を基とするものであった。

爾くして、高御産巣日神・天照大御神の命以て、天の安の河の河原に八百万の神を神集へ集へて、思金神に思はしめて、詔ひしく、「此の葦原中国は、我が御子の知らさむ国と、言依して賜へる国ぞ。故、此の国に道速振る荒振る国つ神等が多た在るを以為ふに、是、何れの神を使はしてか言趣けむ」とのりたまひき。爾くして、思金神と八百万の神と、議りて白ししく、「天菩比神、是遣すべし」とまをしき。（上　九九頁）

天孫降臨に先立って、葦原中国を「言趣け」するために遣わす神を決定する場面である。「大祓の詞」の「皇親神ろき・神ろみの命」が、ここでは「高御産巣日神・天照大御神の命」となっているのだが、天照大御神こそが天皇と最も密接な関わりを持つ神であることは言うまでもなかろう。天照大御神は、皇祖神であり、天皇の守護神でもあった。「八百万の神」の原初的イメージが、天照大御神を筆頭とする高天原の神々にあるとするならば、[3] 先に見た『紫式部日記』や和歌の用例に、天皇守護のイメージがあることも、当然のこととして納得できるはずである。

つまり、「八百万の神」とは、「不特定多数の神々」ではなく「天皇守護の神々」を指すことばであったのだ。源氏は、そのような神々に対して自身の無実を訴えたのであって、その結果として引き起こされた暴風雨の意味も、「八百万の神」との関わりの上で、再検討していく必要があるだろう。

それは、はたして、神の感応なのか、あるいは懲罰なのか。次節において検討していくこととする。

二　鳴る神

須磨を襲った暴風雨の特異性は、それが幾日も続いたことや、激しい風を伴っていたことなど、いくつもの要因が絡み合って描き出されるのであるが、その中でも、特に強調して描かれているのが、雷の被害である。「雷鳴りひらめく」（須磨　二〇九頁）、「雷鳴り静まらで」（明石　二一三頁）と繰り返し語られるその被害は、やがて、先に見たような大規模な落雷となり、源氏の生命を脅かすまでに至るのであった。源氏の和歌に対する「八百万の神」の反応は、具体的には「雷」の力となって顕現している、と考えられよう。

さて、このような「八百万の神」と「雷」との関係は、次にあげる『古事記』の一節を想起させる。

是に、天照大御神の詔ひしく、「亦、曷れの神を遣さば、吉けむ」とのりたまひき。爾くして、思金神と諸の神と白ししく、「天の安の河の河上の天の石屋に坐す、名は伊都之尾羽張神、是、遣すべし。若し亦、此の神に非ずは、其の神の子、建御雷之男神、此遣すべし。……」とまをしき。故爾くして、天迦久神を使はして天尾羽張神を問ひし時に、答へて白さく、「恐し。仕へ奉らむ。然れども、此の道には、僕が子、建御雷神を遣すべし」とまをして、乃ち貢進りき。爾くして、天鳥船神を建御雷神に副へて遣しき。

（上　一〇七頁）

これは、前節で見た、「八百万の神」が葦原中国を平定する神を決定する場面に続く箇所である。第一、第二の使者として遣わされた天菩比神、天若日子が、葦原中国の王たる大国主神に従って復命を果たさなかったため、第三の使者として選ばれたのが、他でもない、建御雷神という「雷神」であった。この「雷神」の派遣によって初めて大国主神の国譲りが成されることとなる。ここに、「八百万の神」と「雷」との密接な結び付きを見てとることができよう。

では、須磨巻において、「八百万の神」は「雷神」の威力をもって、源氏に何を訴えようとしているのか。それを読み説くために、物語を賢木巻まで遡りたい。実は、この「雷」は、須磨の地にあって唐突に現れたものではなかった。須磨巻に先立つ賢木巻には、まるでこの暴風雨を予見するかのように、いくつかの「雷」を見出すことができるのである。

出でたまふほどに、大将殿（＝源氏）より例の尽きせぬことども聞こえたまへり。「かけまくもかしこき御前に」とて、木綿につけて、源氏「鳴る神だにこそ、

八州もる国つ御神もこころあらば飽かぬわかれのなかをことわれ

思うたまふるに、飽かぬ心地しはべるかな」とあり。……宮（＝秋好）の御返りのおとなおとなしきを、ほほ笑みて見るたまへり。御年のほどよりはをかしうもおはすべきかな、とただならず。かうやうに、例に違へるわづらはしさに、必ず心かかる御癖にて、「いとよう見たてまつりつべかりし、いはけなき御ほどを、見ずなりぬるこそねたけれ。世の中定めなければ、対面するやうもありなむかし」など思す。

（賢木　八四頁）

葵巻で斎宮への卜定があった六条御息所の娘後の秋好中宮の、本格的な伊勢への下向が語られる賢木巻。右にあげたのは、その桂川での祓の場面である。源氏は、「八州もる国つ御神」、つまり、現朱雀王朝の宗教的な要となる斎宮に、その母御息所との別れを惜しむ歌を送る。斎宮からの返事に好色心を動かされる源氏の態度は、それだけでも不謹慎なものなのだが、さらに源氏は「世の中定めなければ、対面するやうもありなむかし」という感慨までをも抱くのである。斎宮の任期は天皇一代限りであった。つまり「世の中定めなければ」という源氏のことばは、現在の天皇である朱雀帝の退位もしくは崩御を暗示しているのであって、一抹のゆゆしさを宿したものであると言えるだろう。現朝廷に対する、源氏の微妙な位置を、そこに認めることもできるかもしれない。

このような場面に、一つ目の「雷」は置かれている。「鳴る神だにこそ」と、斎宮へ投げかけられたことばは、次にあげる『古今和歌集』の歌を引いたものであった。

あまのはらふみとどろかしなる神も思ふなかをばさくるものか

は〻　　（恋四・七〇一・よみ人しらず）

思う仲を裂かないと言われた「鳴る神」。しかし、その「鳴る神」が、思う仲を決定的に裂く場面として、他でもない、源氏と朧月夜の密会が露見する場面があったのだ。

いと忍びて度重なりゆけば、けしき見る人々もあるべかめれど、わづらはしうて、宮にはさなむと啓せず。大臣はた思ひかけたまはぬに、雨にはかにおどろおどろしう降りて、雷いたう鳴りさわぐ暁に、殿の君達、宮司など立ちさわぎて、こなたかなたの人目しげく、女房どもも怖ぢまどひて近う集ひまゐるに、いとわりなく出でたまはん方なくて、明けはてぬ。

（賢木　一三六頁）

源氏と朧月夜の密会が露見したのは、雷雨の騒ぎによって、源氏が退出しえなくなったからであった。この露見が、源氏の須磨退去の直接的な原因となったことは周知の通りである。天照大御神に仕える斎宮へと不用意に投げかけられた「鳴る神」のことばは、朧月夜との密会を露見させ、源氏を須磨へと追い詰め、やがて、暴風雨となって源氏の命をも奪わんとする力となって働く、と言えようか。

つまり、賢木巻に見られる「雷」は、斎宮・尚侍という、朱雀朝にとって、政治的・宗教的に重要な女性と源氏との関係を貫き、源氏の臣下にあるまじき不遜な振る舞いを浮き彫りにする機能を有しているのである。「雷」によって照らし出された源氏の王権への侵犯性を鑑みるとき、須磨の地で起こる暴風雨を神の感応ととることは、もはや不可能であろう。

『古事記』神話において、強大な支配力を持ち、幾多の神々を従わせる求心力をも兼ね備えた大国主神の前に、「八百万の神」によって突きつけられたのは、王権の正統性であった。大国主神は、地上の真の支配者とはなりえない。光源氏もまた、「八百万の神」によって引き起こされた暴風雨によって、今まさに、王権から疎外されようとしているのではないか。いかに王的資質を持ち合わせていようとも、源氏は臣下でしかありえない。暴風雨は、朝廷への冒瀆を繰り返す源氏に対する、天皇守護の「八百万の神」が下した懲罰であったのだ。

では、源氏は、いかにしてこの苦境から脱することができたのであろうか。そこには、暴風雨を動かすもうひとつの神の力があったのである。

三　住吉の神

暴風雨を引き起こした「八百万の神」、それが天皇を守護する神々であることは、前節までに検討してきた通りである。実は、暴風雨の場面において、そのような「八百万の神」と実に対照的な位置にある神が存在する。それは、他でもない、「住吉の神」であった。

暴風雨がその激しさを増していく中、源氏は「住吉の神」に祈りを捧げる。

いろいろの幣帛捧げさせたまひて、源氏「住吉の神、近き境を鎮め護りたまふ。まことに迹を垂れたまふ神ならば助けたまへ」と、多くの大願を立てたまふ。

（明石　二一六頁）

「住吉の神」は「近き境を鎮め護りたまふ」神、いわば、辺境の神であって、天皇を守護する中央の神である「八百万の神」とは対極にあると言えるだろう。

また、暴風雨が鎮まった後、源氏は、次のような歌を詠む。

海にます神のたすけにかからずは潮のやほあひにさすらへなましし　（明石　二一八頁）

ここで、源氏が、自身を助けた神を「海にます神」と認識していることは重要であろう。

この「海にます神」については、「住吉の神」か「海龍王」か、と、見解が分かれている。「海龍王」は、夙に若紫巻において、明石君が「海龍王の后になるべきいつきむすめ」（若紫　二七八頁）と評されることから、従来の源氏研究では、あたかも明石一族の守護神のように扱われる向きがあった。ゆえに、ここでも源氏を助ける力となって働くと考えられてきたのだが、しかし、明石君が「海龍王の后」となるのは、明石入道の「思ひおきつる宿世違はば」（若紫　二七八頁）という状況が到来したときであり、それを、須磨巻の状況と重ね合わせるならば、明石君が源氏と巡り会うことかなわぬ状況、つまり、源氏が暴風雨のさなか命を落とす、という負の運命が透けて見えることを押さえておかねばならない。実際、源氏は、夢で見た「そのさまとも見えぬ人」を海龍王の使者と思い、「さは海の中の龍王の、いといたうものめでするものにて、見入れたるなりけり」（須磨　二一〇頁）と、心理的な圧迫を受けていたのであって、暴風雨が止んだことを「海龍王」に感謝するとは考えにくい。やはり、この「海にます神」は、「住吉の神」を指していると考えるのが妥当であろう。

さて、この「海にます神」について、柳井滋氏は「「海にます神」という他の用例は見出し得なかったのであるが、これに対する表現は「あめにます」神であろう。天上にいる神、海にいる神ということである」と指摘されている。[4] ここで、「八百万の神」の原初的なイメージが、高天原の神々にあったことを思い出さねばなるまい。高天原におわします「八百万の神」とは、つまり「天にます神」であると言えよう。「天にます」八百万の神と「海にます」住吉の神。ここにも、両者の対比的な表現を見てとることができる。つまり、須磨・明石巻において、「八百万の神」と「住吉の神」は、常に対照的な位置づけがなされているのである。

では、「住吉の神」が、この暴風雨の場面において果たす役割とは何か。それには、この神の持つ性格が、深く関わってくると思われる。

亦、表筒男・中筒男・底筒男三神、誨へまつりて曰はく、「吾が和魂、大津の渟中倉の長峡に居さしむべし。便ち因りて往来船を看さむ」とのたまふ。是に、神の教の随に鎮め坐さしめたまひ、則ち平に海を度ること得たまふ。　（巻九　四三九頁）

「住吉の神」は、右の『日本書紀』の記事に見えるように、航海の安全を司る神であった。荒ぶる波風を鎮める神、そのような「住吉の神」の性格を、「八百万の神」との対比の構図にあてはめれば、自ずと、暴風雨の構造が浮かんでくるのではないか。すなわち、「八百万の神」が源氏への懲罰として暴風雨を起こしたのに対し、「住吉の神」は源氏を助けるために暴風雨を鎮める働きをしているのである、と。多義的であると言われてきた暴風雨の構造は、「八百万の神」と「住吉の神」の対比の構図を視座とすることにより、簡潔に捉え直すことができるのである。

さて、ここで考えておかねばならないのが、暴風雨の後源氏を迎えにやってくる明石入道の言である。以下、そのすべてを引用しておく。

「去ぬる朔日の夢に、さまことなる物の告げ知らすることはべ

りしかば、信じがたきことと思うたまへしかど、『十三日にあらたなるしるし見せむ。舟よそひ設けて、必ず、雨風止まばこの浦にを寄せよ』と、かねて示すことのはべりしかば、こころみに舟のよそひを設けて待ちはべりしに、いかめしき雨風、雷のおどろかしはべりつれば、他の朝廷にも、夢を信じて国を助くるたぐひ多うはべりけるを、用ゐさせたまはぬまでも、このいましめの日を過ぐさず、このよしを告げ申しはべらんとて、舟出だしはべりつるに、あやしき風細う吹きて、この浦に着きはべること、まことに神のしるべ違はずなん。ここにも、もし知ろしめすことやはべりつらんとてなむ。いと憚り多くはべれど、このよし申したまへ」と言ふ。　（明石　二二一頁）

明石入道は、ここで、「住吉の神」の霊験を語る。

従来の感応説は、入道が夢を見た「去ぬる朔日」が、暴風雨の起こった日よりも前に位置すること、そして、「いかめしき雨風、雷のおどろかしはべりつれば」ということばによって、「住吉の神」と暴風雨とが密接に関わり合うことが読みとれること、この二点を最大の根拠として、暴風雨は「住吉の神」の感応として起こったものである、と結論付けてきた。しかしながら、一読してわかるように、「住吉の神」のお告げは、雨が止んだら舟を出せ、ということだけであり、入道が「まことに神のしるべ違はずなん」と言ったのも、暴風雨が起こったことに対してではなく、嵐のさなかにも関わらず順風に護られて無事須磨に辿りついたことを指しているのであって、ここでも、「住吉の神」の力は、暴風雨を鎮めるものとして働いていることに注意すべきであろう。

明石入道の、明石君を源氏に奉ろうという意志は、既に、暴風雨が起こる直前、物語の上で表明されていたものであった。

・この君（＝源氏）かくておはすと聞きて、母君に語らふやう、入道「桐壷更衣の御腹の、源氏の光る君こそ、朝廷の御かしこまりにて、須磨の浦にものしたまふなれ。吾子の御宿世にて、おぼえぬことのあるなり。いかでかかるついでに、この君に奉らむ」といふ。　（須磨　二〇一頁）

・このむすめ（＝明石君）すぐれたる容貌ならねど、なつかしうあてはかに、心ばせあるさまなどぞ、げにやむごとなき人に劣るまじかりける。……父君（＝入道）、ところせく思ひかしづきて、年に二たび住吉に詣でさせけり。神の御しるしをぞ、人知れず頼み思ひける。　（須磨　二〇三頁）

そして、その願いが「住吉の神」を頼みにしたものであったことを考え合わせるならば、暴風雨に先立つ「去ぬる朔日」に、「住吉の神」が、源氏を明石の地に呼び込む方向で、入道の夢になんらかのお告げを示していたとしても不思議はないはずだ。そして、その夢はただ「信じがたきこと」と語られるだけで、暴風雨を起こす予言とは読みとれない。

また、「いかめしき雨風、雷のおどろかしはべりつれば」も、入道が暴風雨を「住吉の神」の力によるものだと考えていたと読み説く必然性はなく、ただ、事態の尋常ならざるを悟ったと考えればいいものであろう。

たしかに、この入道の言によって、「住吉の神」と暴風雨とは密接に関わることが証明される。しかし、それは、暴風雨を起こす力としてではなく、鎮める力としての関わりであったのだ。実際、暴風雨は一方的に荒れ狂っていただけではなかった。

・暮れぬれば、雷すこし鳴りやみて、風ぞ夜も吹く。供人「多く立てつる願の力なるべし」「いましばしかくあらば、浪に引かれて入りぬべかりけり」「高潮といふものになむ、とりあへず人損はるるとは聞けど、いとかかることは、まだ知らず」と言ひあへり。

（須磨　二一〇頁）

・あやしき海人どもなどの、貴き人おはする所とて、集まり参りて、聞きも知りたまはぬことどもをさへづりあへるも、いとめづらかなれど、え追ひも払はず。海人「この風いましばし止まざらましかば、潮上りて残る所なからまし。神の助けおろかならざりけり」と言ふを聞きたまふも、いと心細しと言へばおろかなり。

（明石　二一八頁）

一時的にせよ、嵐の止んだ様子が語られ、反実仮想の形で不幸中の幸いが示されることによって、そこに、暴風雨を鎮めようとする力をたしかに読み取ることができるだろう。

従来の説は、いずれも、暴風雨を起こす力のみに眼目を置いていたため、「住吉の神」に重きをおけば、暴風雨のすべてをその力によるものと解釈せざるをえなかった。しかし、暴風雨を鎮める力をそこに認めるならば、その構造は矛盾なく理解できるのである。

「八百万の神」と「住吉の神」は、二つの対極的な力となって、暴風雨と源氏の運命をを動かしていたのであった。

おわりに

以上、「八百万の神」と「住吉の神」のそれぞれの役割を考察し、その対比の構図を視座とすることによって、複雑と言われる須磨の暴風雨の構造を読み説いてきた。

本稿では、須磨の暴風雨のみに論点を絞ったため、都で起こる「もののさとし」については言及しなかった。贅言を弄するならば、王権への侵犯による罪が源氏にあるとすれば、その侵犯を許した朱雀帝もまた王としての資質を問われねばならないだろう。「もののさとし」の結果、朱雀帝は退位することとなる。光源氏と朱雀帝、両者が王権から遠ざかることこそが、須磨の暴風雨の真意だったのではなかろうか。

従来の王権論では、須磨・明石巻の苦難は、源氏が王権により近づくための「死と再生」の過程と考えられてきた。だが、源氏は、澪標巻以降、着実に、臣下としての栄達の道を歩んでいく。「宿世遠かりけり」（澪標　二七六頁）という源氏の述懐は、須磨の暴風雨を経験して初めて辿り着くことのできた境地であったのである。

注

（1）須磨の暴風雨について論じたものの中で、今回特に参照したものを以下にあげておく。

柳井滋「源氏物語と霊験譚の交渉」（『源氏物語　研究と資料―古代文学論叢第一輯―』武蔵野書院　S44）

深沢三千男「光源氏の運命」（『源氏物語の形成』桜楓社　S47）

林田孝和「須磨のあらし」（『野州国文学』22　S53・10）

阿部好臣「源氏物語の朱雀院を考える―序章・王権を越えるもの―」（『日本文学』38　H1・3）

山田利博「須磨の嵐―反転するテクストの構造―」（『文学・語学』141　H6・3）

豊島秀範「須磨・明石巻における信仰と文学の基層」（『物語史研究』おうふう　H6）

河添房江「須磨から明石へ」（『源氏物語表現史』翰林書房　H10）

（2）三谷邦明「須磨流離の表現構造」（『物語文学の方法II』有精堂　H1）

（3）『古事記』に見られる「八百万の神」の用例は、他に、天の石屋戸の

場面に集中的に見られるのみだが、ここでの「八百万の神」とは、天照大御神を石屋戸から引き出すために集まった神々を指していて、「八百万の神」が、天照大御神をそのヒエラルキーの頂点にいただく高天原の神々であることは動かない。ちなみに、『日本書紀』における当該場面では、「八百万の神」にあたる神々は「八十万神」「八十諸神」と表現されている。

(4) 前掲(1)柳井論文

※『源氏物語』本文の引用は、日本古典文学全集（小学館）によった。
その他の引用は、以下の通り。
・『古今和歌集』『拾遺和歌集』……新編国歌大観（角川書店）
・『江師集』……私家集大成（明治書院）
・「大祓の詞」……日本古典文学大系『古事記 祝詞』（岩波書店）収載「六月の晦の大祓」
・『古事記』『日本書紀』『紫式部日記』『栄花物語』……新編日本古典文学全集（小学館）
なお「大祓の詞」『古事記』『日本書紀』は、訓読もそれぞれのテキストによった。